壽壬生隆祐筆本萬葉集

第八巻

雑詩

雄略天皇

泊瀬朝倉宮御宇大泊瀬幼武天皇御製歌一首

暮去者小椋山乎賀藝可吉鳴鹿乃音乎聞之苦毛

良尓

右歌奉書夫自身所製不審不知日次筆載

無年号但字体筆法行間時歌二首

為姓氏玉裕国実過有玉治持主国実清白記

いそのかみ ふるきみちを たづねきて
なほもとのもとに ありてこそ行け

朝雪今朝今日花不手折一枝君之山苞遣将越

おもきまちにわれありしものをなほもとのもとにやうぐひすのなく

右三首作者未詳

大寶元年辛丑冬十月大上天皇大行天皇幸紀伊國時歌十三首

為妹我玉桙之道有白玉依生之小松根乎

いもが玉ほこの道にしらたまよるおふるこまつねをいざ結びてな

右一首上古旧辞不載此歌未詳作者

公家集

白塚菊童花待大船之奥振袖笠文将頃
待さまいかさもあのうまでをたぬ袖を
まつちしまわまいまつこのみも
三名川の浦波美濃唐嶋花釣為海人手自之愛里
六
入門はみなと新なる入門おもう角なる
門つまあまの入くかつまも
朝間湊也我菊湯罪前釣為海人手自之時
里

湯乃前堀乾之林寒泉表白神之磯浦里千年
謗訓 ゆきのさまにしるしてかまもる神ぐらの人ぬ
いろのうつくしきをつくる
依假名考之
黒牛方堀干乃浦辛紅玉藻須佐森西往者誰妻
そろそろしるし神かみのうつくしけなめ
主角をよろこびまゆくしきをつくる
斯依
児妻乃涙之白波往来斯保久流当人世一云於之流
妻之陸
うつくしきかみのうつくしきをつくる
こまよをうつくしとおもふ

右一首山上憶良類聚歌林曰天皇幸于吉
野宮之時儲作此詩

我有児我使将来如比可愛
吾妻

わが子のうつくしさもかくしあらむ
このまに〳〵(ニコムトイヒテ)

藤白坂三枚辛垂比日捧之我手者所流涙
不堪禁

ふぢしろさかみつのたをりひのころわがてにささげしときはながるるなみだ
とどめかねつも

勢能山今昔葉帝歌神 名之山昔葉者今日
散過 ばりやまとりの人ちりねれくうみうみ
やまとりの人ちりねれくうみうみ

山辺道前往欽大我野之行昔木刀処製屋為有
辺者 やまとふいまここもゆくつたなつのつ
ちつついうわしまいわねのまとい

本国之者之雁之贈矢用麻取麻坂之手貫垂而
まろふのもうつのえねをなうやまて
ねつのものなくやのへまろうあり
カトリナニカ

坂門年不詳従三位藤原卿薨去時歌二首

坂門一云婦明石

まろくろやまうらさびしかりけむ

一云婦ニシテ

ここにありてかなしかりけむ

右一首或云坂上郎女悲嘆尼作歌

後人歌二首

朝霧乃去来方乎君我伝山越遠乎曽雨乎疑

あさきりのいにへゆくへをきみがつてやまこえとほみかもあめをうたがふ

桃

ももしきのおほみやびとのまかりてやまこえとほみかもあめをうたがふ

いそのかみ ふるきみやこに うつりすみ
わびさびしらぬ (サビシラヌ) (ヒト) (シモ) (ヤマ) (ノ) (ヤド)

香山翁献壽主幹三和山翁主會云行時分
もろやまに ちりまがひたる (チリ) (マガ) もみぢばを
いまたけふとや (ケフ) 人もとふらん

宗河邊同人翁献歌二首
河邊邸宇回看玉鴛鴦乱舞花川亭
うつせみの (カミノ) 春 (ハル)
ちりそめて (ヒ) うつろふ (ウツロ) 色 (イロ) (ヲ) 人 (ヒト) (ノ) 身 (ミ) (ニ) (モ) (カモ)
ちりそめて うつろふ (ウツロ) 色 (イロ) (ヲ) 人 (ヒト) (ノ) 身 (ミ) (ニ) (モ) (カモ)

弥生頭刈玉之祓速乱初言志才川瀬尓
みそきつゝみもとめいこゝろ
入てふまてゝ祓このてふ祓ふ

鷺坂作歌一首

白鳥鷺坂山松歌首并往来夜毛宿生ト詠
我ゝとわれさまつのやまの
やとりてゆうもよもあらなくに

名木河作哥二首

焱干人母在八方沾衣乎家者夜良奈羈之印

在衣邊着而榜（椿）尼杏人濱過者戀布在奈利

高嶋作謌二首

高嶋之阿渡川（波）波者驟鞆吾者家思宿加奈之弥

たかしまのあとかはなみはさわくとも
われはいへおもふやとりかなしみ

客在者三更刾而照月高嶋山隠惜毛

鷺坂作哥一首

細比礼乃鷺坂山尓自雲乍雨降来鴨

しろたへのひれのさぎさかやまにしらくもつつゝあめふりきたるも

泉河作哥一首

妹門入乎見川乃底奈久三雲遊鴨

いもがとをみるかはのそこなくみくもつゝあそぶかも

みゆきのこれをいまらふゆのそ

名木河作歌三首

秋千ゝ名木之川邊ニ手書而云立寄家ニ
試ニ

家人徒在之書而乃与久列柿会ホ千流会者

森千人世在八方家人手可而頂記年間使令為

宇治河仏歌二首

巨椋乃入江響奈昧月丹
妻呼秋沙鴨
波良々々

金風山吹瀬乃響丹
天雲翔鶴相鳴

敬弓斎主子請　三首

佐賀本莽二夜有洋主宅野鳥音四囲寂
夏

妹尾辰苑音久敷主邸所感主及
二首

重陽鳴時秋山黄竹待時有雅趣

舍人皇子御哥一首

冨士の夜の雪を花に喜て高屋を歌に被麻天女

うちなびき春さりくれば
もろもろの
やまのかすみも
たちわかれ
ゆきまをこえて
うぐひすぞ
なく

鶯改作歌一首

山代乃世乃鶯改自神代者者乃花有者哉

やましろの
よのうぐひすは
かはりけり
かみよはものの
はなにありけり

乳河邊作歌一首

春草馬咋立白絲亦絡取佐保河邊乎

和

獻弓削皇子歌一首

御食乎者而南淵山之巖者雪曾降敷

落墅多

山上哥一首

白妙の袖ふる浪の末の手綱草我世左右二箇年
津乎巻いくらもまてとつげへやる

右一首和二川邊宿禰水通哥

看日歌一首

三川之渕瀬物不落左流水我心者不定念

衣

高市謌一首

ひとのうへのふらぬをかちすさとしに

ころもてやかれぬかすくはなしに

足利思代榜行舟薄高嶋之足速之水門尓極尓監鴨

春日蔵謌一首

照月遠雲莫隠嶋陰尓吾舟将極留不知毛

てるつきをくもなかくしそしまかけに

わかふねはてむとまりしらすも

ト人或本

右一首或書云小弁従也未詳姓氏世記未詳
或書不傳姓名也伝云記使人歟新古歌類下載
之
文
元仁評云

雨毛布打霧渡奈良野之川辺何時鴈鳴
ここまでは終ってうちにれにけりふるとの
よりくるかりがねのこゑ

辛荒脱去日鴨去野川清河原宇雁迄不絶云

辛荒暁去回鴨荒野川清河原宇雁更不鳴

鴛鴦歌一首

欲見まこと久毛なれ久去野川音清左見二叉春

天雲のそくへ靡くもしるくもみつ
花のさかりに人の来らし

磨誦一首

右之賢人之遊二重去野川原雅見不飽歟
いかにく花のさかりに有よもあそばまし
よしそうそう人なとあのやうに

右柿本朝臣人麿之歌集出

丹比真人歌一首

在第一巻廿寺

難波方塩干尓出而玉藻苅海未通女等汝名告乃

なにはかたしほひにいてゝたまもかる
あまをとめともなかなのらさね

右郎

和歌一首

朝入為流人跡乎見座草枕客去人尓妾者不敷

丹山霞 初秋 別右衛門 漫吟 等 万宝六句

たなやまふるみち人もなし秋さらば

わけこえむこまもがもすも

思花雖盛不知所以 尾張 長乃浦 辛之助

たちよりてそれとはわかぬ

まがきよりこぼるる花

等歌一首

高湯 三宅和助 宇源 四十五歳 医業 浦 十吉 時

訊上徐生洗冤娘子一節并述再

水長鳥母房午繼有捧高生的洗冤錄之
高云姓曰細之項軽娘子之其婆之婿正欠此
范哭而云有王捧的前述的人者七件前述者云
而不云今的至如指面降之云者予見七重雖而
不云午錢石仵事詩人乃如是事有者云歟
徐而當姓者多說乳云有云而

反歌

金門今之人乃生立者之也中母身者田菜通不知也
曽根連

日本紀私記云古古記云

秀日之落時今宝志左之寄子也反不釣舟
水江浦嶋子一首并短哥

平民布見者左之事有而今水江之浦嶋子

平臣布見者右三事皆所以令民記之清慎

毛先呂ん比止明日者者ま南盤三元乱礼安姓
ゝ菱久多寺世思後不要来而時將相悠太字院
婆时迄同分甘数豪已良久年似目所事乎
墨先年留遥ま不出乱見悠宅元見金手宜恩
悠里毛見人金手恨常高礼年金久依家也而三
威三闕年墻毛元家謝目へ悠时莫乎閑而見
手喜以ま本字乱者將有登里い迄而枚年白云

風之附年壌元元氣調同へ処寸甚年間帝皇

手蹟以来大家名筆将有参玉ひ(ヒ)し(シ)お(ヲ)ほ(ホ)へ(エ)なき(キ)
之自(ヨリ)猶(ナホ)名高き世(ヨ)の称(ホメ)ある所(トコロ)也(ナリ)。去者(ハ)三州(ミカハ)神(カミ)社(ノヤシロ)
近年(チカキトシ)スリ(ル)もの(ノ)ニ(ヲ)而(テ)久(ヒサ)しく(ク)有(アリ)し(シ)筆(フデ)
又(マタ)偽(イツハリ)多(オホ)く(ク)和(ワ)哥(カ)短冊(タンザク)清(キヨ)書(カキ)ニ(ヲ)而(テ)消失(キエウセ)数(カズ)有(アリ)之(コレ)候(ソウラフ)
歌(ウタ)数(カズ)黒(クロ)有(アリ)之(コレ)候(ソウラフ)ニ(ヲ)而(テ)疎(ウト)数(カズ)白(シロ)疎(ウト)数(カズ)
伝(ツタヘ)絶(タエ)不(ズ)候(ソウラフ)ニ(ヲ)而(テ)長(ナガ)元(ゲン)禄(ロク)之(コレ)頃(コロ)ニ(ヲ)而(テ)流(ナガレ)水(ミヅ)ニ(ヲ)而(テ)清(キヨ)書(カキ)
記(シル)之(コレ)

又舞

往

常世邑可住物乎釼刀己之私物不有也思者
（ここかしこの意か）
見河内大橋獨去娘子哥一首并短

紅葉行兒羽河之丹塗大橋之上他兒赤裳裙

十列乍通明獨衣服而直獨行（佐）（猶歩）波乃兒者美

草乃夫妻有己武擅（さう）宴之獨伏將宿哥乃

草乃夫君有之弐擅宴之猫(なう)(猫ヵ)妖将(ヵ)

傳壬生隆祐筆本萬葉集解說

萬葉集は、永い傳來の間に書寫を重ねて、誤謬衍脫も少くない。それで、これを文獻に照し、義理を考へて原形に復す作業が爲されるのである。而してその研究資料として、まづ古鈔本の必要が存するのである。

仙覺以前の萬葉古鈔本の傳へられてゐるものは、多くはない。平安時代の書寫にかかる本としては、桂本、元暦校本、藍紙本、金澤本、天治本の五種があつて、これらは皆、玻璃版によつて複製印行せられ、學者の座右に備へることが出來る。次いで、鎌倉時代の寫本としては、尼崎本、嘉暦傳承本、春日本、傳壬生隆祐筆本、神田本、西本願寺本があるが、尼崎本、春日本、西本願寺本は既に印行せられたので、今ここに、未刊の三本のうちの一本を印行して、學界に贈らうとするのである。

傳壬生隆祐筆本萬葉集は、巻九の本文の初の標目より、歌數にして八十四首、

吾去者七日不過龍田彦勤此花乎風爾莫落（以下本文、寛永本）

の歌までを存してゐる。縦七寸八分、もと冊子本で一頁に六行づつ書いてあつたのを、巻子本三軸に改装してある。いま印行に當つて、舊態に還元することとした。筆者に就いては、古筆鑑定家の「壬生殿隆祐卿」といふ極札が三枚ある。隆祐は家隆の息で、新撰古筆名葉集には、古今源氏新古今を書寫した切が擧げてあり、現に古筆手鑑の中にも散見してをるが、この萬葉集を隆祐の書とすることは、徴證がない。但、鎌倉時代中期の寫本たることは確に認められる。

この本、題詞を低く歌を高く書き、訓は本文の次に平假字で別提してある。漢字及び訓の傍に片假字の訓を附してあるところがあり、また、一本、或本等に依つて校異が加へられてゐる。

系統に就いては、未詳といふ外はないが、

雲隱鴈鳴時秋山黄葉片待時者雖過

の鳴時の右に、「字落歟數本如此」とあつて、數本に依つて校合を加へたものの如くである。又、

白鳥鷺坂山松影宿而往奈夜毛深往乎

の歌の訓、「しらとりの」の「ら」の右に「ロ孝本」とあり、

古之賢人之遊兼吉野川原雖見不飽鴨

の歌の訓、「かしこきひとの」の「かしこき」の右に、「サカシキ孝本」とある。又、

湯羅乃前塩乾爾祁良志白神之磯浦箕乎敢而榜動

の歌の訓の下には、「依假名本書入」とある。この孝本と云ふのは、忠兼本系統の本に依つて知られる惟宗孝言の本を指すものと思はれる。孝言本は忠兼本系統の本に見える校本の名であるから、この傳壬生隆祐筆本も、忠兼本系統の一本と見るべく、これを否定すべき材料は今のところ見出されない。

巻九の前半、この本に存する部分は、古本としては藍紙本が同じく存してゐる。今、藍紙本の同所と傳隆祐筆本とを比較するに、一致するものが多いが、相違するものも少くはない。その傳隆祐筆本に依つて、本文を訂正すべき二三の例を擧げよう。

河瀬激乎見者玉藻鴨散亂而在此河常鴨

この本（傳隆祐筆本、以下同じ）に「藻」の字及び「此」の字無く、「河」を「川」に作つてゐる。これは藍紙本、類聚古集等と一致するところである。これにより、三句をタマヲカモ、五句をカハノツネカモと讀むべきであらう。

家人使在之春雨乃與久列杼吾乎沾念者

この本に、「吾」の下に「等」がある。藍紙本、類聚古集等これに同じ。

馬屯而打集越來今日見鶴芳野之川乎何時將顧

この本に、「日」の字が無い。類聚古集等これに同じである。これに依つて、イマミツルと讀むべきで

ある。但、藍紙本に傳はらぬところである。

高島之足利湖乎榜過而塩津菅浦今者將榜

この本に、「者」を「香」に作つてゐる。藍紙本、類聚古集等、これに同じ。これに依つてこの句を、イマカコグラムと讀むべきが如くである。

常世邊可住物乎劔刀己之心柄於曾也是君

この本に、「心」を「行」に作つてゐる。これに依るとこの句を、オノガワザカラと讀むべきが如くである。

吾去者七日不過龍田彦勤此花乎風爾莫落

この本、「日」の下に「者」の字がある。藍紙本、類聚古集等これに同じである。仙覺本の訓もナヌカハスギジであつて、これを改めるものではないが、この字のあつた方が正確である。

この本は、もと伊勢松阪に在り、松本秀業氏の所藏であつたのを、明治四十一年に同地に赴いたをり購ひ得て、竹柏園の架藏に歸したのである。第三軸の裏に、

去子ノ十二月十九日暴動近火ノ節鈴併ニ家寶類ヲ預リ候謝トシテ同十年丁丑一月十七日本居氏ヨリ惠

投セラルヽ處　共ニ三卷　　楛園松本秀業秘藏

と ある。本居家に就いて聞いたに、宣長翁の藏書は、その目錄現存せるも、それが中に無く、翁の女のと

預リ候謝トシテ同十年丁丑一月十七日本居氏ヨリ恵

投セラルヽ處　共ニ三卷　　楮園松本秀業秘藏

とある。本居家に就いて聞いたに、宣長翁の藏書は、その目錄現存せるも、そが中に無く、翁の女のとつがれた四日市の高尾家は、茶事を好み、かかる古筆の類をも蒐藏してゐたので、明治時代に、高尾家より出でて本居家を嗣がれた信郷ぬしが持ち來られ、從つて松本氏に贈られたものと思はれる、とのことであつた。

古筆の極札の外に、古くより添うてゐた大倉好齋の書翰並に同筆の隆祐の小傳と、自分が、明治四十一年に、木村正辭、小杉榲邨、二博士に請うた文詞、及び前田香雪翁の副簡極が添うてをるが、校本萬葉集首卷（一一七頁）に揭げてあるので、ここには省略する。

なほ本書は、さきに、文部省より、重要美術品に指定せられた。

昭和十五年十月

佐佐木信綱